様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１２日現在

機関番号：12401
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520348
研究課題名（和文）1930 年代後期から 40 年代初期の中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する研究
研究課題名（英文）Studies of the Literature and Arts Activities of the Chinese Students Abroad in Japan in the Late 1930's and the Early 1940's
研究代表者
小谷　一郎（KOTANI　ICHIRO）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：60136009

研究成果の概要（和文）：本研究による具体的な研究成果は下記「研究成果」に記した通りである。本研究では１９３７年の盧溝橋事変勃発後も日本側官憲が中国人日本留学生に対する弾圧の手を緩めていなかったことなどを明らかにし、各関係事件の一次資料を初歩的ではあるが入手し、それらを埼玉大学に集中し、現在も整理、分析、データベース化が進行中である。また本研究よって、国内だけではなく国外の研究者とのネットワークを確立出来た。
研究成果の概要（英文）：Our studies has demonstrated that the Japanese officials never ceased to clamp down the Chinese students abroad in Japan even after the Marco Polo Bridge Incident broke out. We also attained a collection of relevant primary documents in our preliminary step, retaining them at Saitama University. We are now in the process of rearranging, analyzing, and building a database of, these documents. It must be added that through this study, we succeeded in establishing an academic network with the researchers inside and outside Japan. The specific results from our studies follow in the below.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：各国文学
科研費の分科・細目：中国文学
キーワード：東京左連　1930 年代後期　1940 年代初期　中国人日本留学生　留学生の文学・芸術活動

１．研究開始当初の背景

(1)1930 年代日本における中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する研究は、1980 年代になって、中国人日本留学生内に 30 年 3 月に上海で結成された中国左翼作家連盟の東京支部「東京左連」が存在したことが明らかになり、注目されるようになった。

(2)だが、そこには彼らの活動が非合法的側

面を持っていたため資料的な制約、一次資料、関係資料が少ないという研究以前ともいうべき障碍があった。

(3)このため中国側の研究者が本研究課題に強い関心を抱きながらも、ことの舞台が日本、しかも日中戦争が激化している3,40年代の日本ということもあって一次資料、関係資料等の発掘、整理などからはじめなければならない本研究の遂行は、ほとんど不可能に近い状況にある。

(4)こうした中にあって、かかる中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する掘り起こし作業を行うのは日本側研究者に課せられた課題の一つであろうと考え、研究代表者は平成14年度～16年度科学研究補助金、基盤研究(B)「1930年代にほんにおける中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する総合的研究」(研究代表者:小谷一郎。課題番号:14310202)などの交付を受け、その掘り起こし作業、実態の解明に努めてきた。

(5)本研究はこうしたこれまで積み重ねてきた中国人日本留学生の文学・芸術活動に対する掘り起こし作業の一環であり、その延長線上に位置付けられるものである。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、これまでまったく研究の「空白部」となっていた、1930 年代後半から 40 年代における中国人日本留学生の文学・芸術活動の掘り起こし作業、具体的には日中戦争が全面化する盧溝橋事変前後から太平洋戦争勃発前後までに照準を当て、中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する一次資料、関係資料の発掘、収集、実態の解明など企図したものである。

(2)起点を37年7月の盧溝橋事変前後としたのは、事変勃発を前に日本側官憲が留学生の活動に対し度重なる弾圧を重ね、中国人日本留学生の文学・芸術活動が大きな打撃を受けているからである。また、事変の勃発は留学生の間に大量帰国という減少を引き起こし、中国人日本留学生の数は大幅に減少した。このため、中国人日本留学生に対する研究は、37 年を一つの区切りとし中断されてしまうのが現状なのであるが、しかしながら、その時、相当数の中国人留学生が残っていたこともまた事実であり、彼らの活動が事変勃発前の活動とどのような繋がりを持ち、彼らがそこで何を思い、どのように活動していたのかを知ることは、単に中国人日本留学生史というだけでなく、日中の近現代史、日中交流を考える上でもきわめて重要なのではないかと考えたからである。

(3)下限を太平洋戦争勃発前後としたのも同様の考え、問題意識からである。太平洋戦争の勃発が中国人日本留学生に与えた衝撃はどのようなものだったのか、戦争の勃発によって留学生の文学・芸術活動にどのような変化が生まれたのか、生まれなかったのか、そして戦時下における中国人日本留学生の文学・芸術活動は存在したのか、あったとすればそれは何だったのか、そうした「空白部」の掘り起こし、解明を可能なかぎり果たしたかったからである。

３．研究の方法

(1)上記のような「研究の目的」からしても研究に第一に求められるのは、中国の各研究機関、日本国内の各研究機関に分散、かつ埋もれているかも知れない一次資料、関係資料を可能なかぎり発掘して、掘り起こし、それ集中し、積み重ねて行くことである。この方法自体は従来の研究方法とまったく同じである。そこにあるのは実証的な地道な資料発掘、事実の掘り起こしとその積み重ねでしかない。

(2)このためまず行ったのは、日本国内の各研究機関に赴き、散逸している資料の発掘、収集に努めると共に、中国の各研究機関に赴き、そこに眠っているかもしれない資料の発掘、収集と、本研究課題に関心を寄せている各研究者との研究協力、研究者間のネットワークを形成することである。

(3)次いで行ったのはそれら発掘した資料を代表者の所属する埼玉大学に集中し、その整理、分析作業、その公開を図ることである。この作業は現在もなお進行中である。

４．研究成果

(1)資料の発掘・収集　本研究では「研究の目的」にも記したように「未開拓」、研究の「空白部」であり、一次資料、関係資料の発掘、収集が不可欠な作業である。その成果は必ずしも十分とは言えないが、それでも本研究の遂行によって、下記のような成果を得ることが出来た。

①時の中国人日本留学生の文学・芸術活動、なかでも美術活動に関することがらが明らかになった。研究代表者は、2012年「東京左連」に関係した木刻芸術家黄新波の展覧会を目にすることが出来、同展覧会を担った黄新波の娘黄元氏からじかに説明を受け、同氏から大量の黄新波に関する資料の提供を受けた。現在、提供された黄新波の写真資料の一部を基に「黄新波に関するいくつかの写真から--1930年代後期中国人日本留学生文学・芸術活動断章」を『中国文芸研究会会報』に連載中である。

(2)1937 年盧溝橋事変勃発後、日本に亡命中だった郭沫若が日本を「脱出」したことを機に起きた「人民戦線事件」関係、郭沫若の日本「脱出」に関係した人々、事変後の留学生の動きなどが初歩的にではあるが明らかになった。

①王道源について　王道源は東京美術学校出身の画家であり「人民戦線事件」の関係者である。代表者は 2013 年広州美術学院の蔡涛氏の手引きで、広州美術館蔵の王道源の作品を直に目にすることが出来、幻の画家といわれる王道源について研究を進めている蔡涛氏と今後の研究協力を結ぶことが出来た。日本留学時代の王道源については近く上海魯迅博物館の雑誌『上海魯迅研究』に「関于王道源以及“青年芸術家聯盟”的事」が訳載される予定である。また、王道源が、事変勃発時に駐日大使館の参事を務めていた王芃生が帰国後に設立した情報機関「国際問題研究所」に関与し、諜報活動にも従事していたことが明らかになり、今後王芃生と王道源、時の駐日大使許世英等との関係、「国際問題研究所」などに研究を進めている必要性が出てきた。

②王芃生については、陳爾靖編『王芃生與臺灣抗日志士』(台湾・海峡学術出版社　2005 年 12 月）を入手し、台湾国史館などで関係資料を確認した。

③台湾からの留学生については『臺灣戦後初期留学教育史料彙編−留学日本事務』などの資料の一部を入手した。

④盧溝橋事変勃発後、先の「人民戦線事件」だけではなく、満州国からの留学生内に共産党組織が存在するという名目で大規模な検挙事件があったことが明らかになり、満州国からの留学生に対しても研究を進めなければならないことが改めて明らかになった。

⑤事変勃発に伴う検挙事件で停刊に追い込まれた『留東新聞』その他のその後について明らかになった。『留東新聞』の関係者は強制送還になった後、『留東新聞』の後継として上海で『遠島新聞』を発行し、関係者の一人簡伯村は「中蘇文化協会」の機関誌『中蘇文化』と関係していることが明らかになり、そうした一次資料、関係資料の発掘が今後の課題の一つとなっている。

⑥もう一つの留学生の雑誌だった『留東学報』とその編者陳固廷については、陳固廷の回想がいくつか入手できたものの、それ以外の資料発掘はまだ十分ではないものの、本研究によって単なる学術雑誌と考えられていた『留東学報』が、主編陳固廷個人をも含め今後明らかにされるべき研究対象として浮かび上がってきた。

⑦また、時の日本留学生が日本国内で出していた雑誌その他については、日華学会の公的な雑誌である『日華学報』以外に、特別な資料（同人誌、同郷誌、同学会誌など）などはまだ発掘できていないものの、これまでに入手し得た『留東週報』など新たな研究対象が生まれつつあることも確認できた。

⑧さらにまた、本研究を通して「大東亜文学者大会」に参加した人々のことが新たな研究対象として浮かび上がってきた。「五族共和」、「大東亜共栄圏」を謳ったそこには「中国代表」だけでなく、「台湾代表」、「満州代表」、「朝鮮代表」などがいる。そうした人々が、なぜそこに参加したのか、その思いは何だったのか、また戦後彼らがそれぞれの厳しい状況の中でどのような軌跡をたどったのか。それらは、日本側研究者が責任を持って明らかにすべき問題であろう。

(3)研究者間のネットワークの確立　この点では大きな成果を得ることが出来た。本研究の遂行によって、北京大学中文系、中国社会科学院文学研究所、上海魯迅紀念館、汕頭大学新国学研究センター、広州美術学院、広州美術館、台湾大学、台湾国史館と連携できたばかりでなく、上記研究者以外にも、多くの方々との研究ネットワークが確かなものとなり、多くのご助言、資料提供を受けることが出来た。それらの資料はすべて埼玉大学に集中し、現在も整理、分析作業が進行中である。

本研究課題は、以上のようにいまようやくその端緒に着いたばかりである。残されている問題は数多い。そのためにも今後とも地道な掘り起こし作業、「実証研究」を進めて行く必要がある。繰り返しになるが、本研究課題はいまようやくその「入り口」に立つことが出来るようになった。研究代表者としては、本研究がひとつの礎となり、今後の研究が進展することを念じてやまない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

１．小谷一郎「黄新波に関するいくつかの写真から（三)」『中国文芸研究会会報』第 376・377 号、査読無、2013、17～19 頁。

２．小谷一郎「黄新波に関するいくつかの写真から (二)」『中国文芸研究会会報』第 375 号、査読無、2013、5～7 頁。

３．小谷一郎「黄新波に関するいくつかの写真から (一)」『中国文芸研究会会報』第 374 号、査読無、2012、6～7 頁。

４．小谷一郎「中国人留学生と新興木版画」『民国期美術へのまなざし』・『アジア遊学』第 146 号、査読無、2011、142～150 頁。

５．小谷一郎「関于東京“左聯”重建旅日中国留学生的文学芸術活動」汕頭大学新国学研究中心『新国学研究』第 7 輯, 査読有, 2011, 279～315 頁。

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計 3 件）

１．小谷一郎著、王建華訳『東京“左聯”重建后留日学生文藝活動』上海社会科学出版社、2012、279 頁。

２．小谷一郎『1930 年代後期中国人日本留

学生文学・芸術活動史』汲古書院、2011、265頁。
　３．小谷一郎『1930年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』汲古書院、2010、286頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
小谷　一郎（KOTANI　ICHIRO）
（埼玉大学・教養学部・教授）

　研究者番号：60136009

(2)研究分担者：（なし）

(3)連携研究者：（なし）